川崎医療福祉学会誌　Vol. 15 No. 2　2006　403–410

原　著

Successful Aging に関する研究の概観と今後の課題
— 海外文献からの検討 —

松本啓子[*1]　若崎淳子[*1]

要　　約

Successful Aging に関する先行研究のうち海外文献に焦点を絞って，15文献の検討を行った．文献には大きく３つの捉えがあり，１）Successful Aging に関する概念提唱や要件や条件の設定を主張したもの，２）人口動態や静態を検討した上で，現状の調査を行い，対象者の思いや認知機能等いくつかの尺度を投入し，量的に分析し，その差異を検討したもの，３）Successful な老いへの過程や老い自体を，その渦中にある対象者に面接を実施し，見えてくる老いの意味を因子探索的に分析し，そのカテゴリーを抽出したものであった．

今後は海外での充実した理論や概念構築に追随するべく，我が国独自の社会的，文化的背景を反映した Successful Aging の概念の定義化や条件，要件も念頭に，対象者自身が語る経験や思いや思考について幅を拡大して，研究を進め蓄積させてゆくことが望ましいと考えられる．また同時に，対象者自身の主観的分析から安寧や QOL 等，Successful Aging の類似概念との関連を既存尺度の選定も含めて尺度開発等を通して，明らかにしていく必要がある．

緒　　言

65歳以上の高齢者人口の総人口に占める割合（以下，高齢化率とする）は，年々増加の一途を辿っている．我々専門職は，老いや高齢者問題を注目し，高齢化の行方を注視している．老いを恐れ，人口の高齢化を危惧しているがゆえの現象でもある．高齢者観は，その時代や社会状況によって大きく変化を見せる．一般に，我々専門職の高齢者観は，サービスの質に影響を及ぼすと言われている．positive な高齢者観は，サービスの質を向上させ，negative な高齢者観は，質の低下を招くということである[1)]．

高齢者を生産性や力強さ，早さや達成度等に重点を置き評価した場合，その評価は否定的に傾く傾向はある．だが，寝たきりや認知症の発生率を統計からみても高齢者の４～５％程度であり，ほとんどの高齢者は元気で健康に歳を重ねている側面も事実である[2)]．

社会老年学の領域においては，高齢期における適応あるいは Successful Aging をめぐる問題に関する議論や言及が，1950年代から米国において諸理論や学説として提起・検討・修正をされてきている[3)]．1980年代には，欧米のプロテスタント文化圏における基本的価値である「自立 independence」と「生産性 productivity」の維持を目標とする Successful Aging の研究と運動は，高齢者の可能性を追求し，自立し，且つ活動的な高齢者のライフスタイルが高齢者の社会的地位や評価を再び上昇させ，多くの不可能を可能にしてきた[4)]．

現在，Successful Aging に関しては，老化に焦点を当てた長期に亘る縦断研究の重要性が認識されている．当然，その条件の根底には，加齢に伴う社会的世界の縮小に抵抗しつつ，可能な限りの活動を維持し続け，継続の不可能な活動に関してはその代用物を見つけだすアプローチである活動理論がある．加えて長寿，健康，満足をキーワードにしている Palmore[5)] や Aging の概念を Successful と Usual の２つの視点に分けて考えている Rowe ら[6,7)] などの米国での研究が主流となっている．

従来の Aging の退行的イメージから，否定的側面のみでなく肯定的捉えに注目する流れもある中，我が国では，嵯峨座[8)] が，Successful Aging を規定する要件として長寿，健康，満足，活動の４つを挙げている．米国の研究は，Successful Aging を，満足や幸福などの生活満足度指標の測定により把握しよ

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科
（連絡先）松本啓子　〒701-0193　岡山県倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-Mail: keimatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp

うとする傾向があり[4,9]，これらの指標は客観性や裏づけとしてのデータや真実性に欠ける[10]．

我が国の文化・風土に即した社会的文化的背景からの研究報告[11−15]は，散見されつつあるが，傾向として３つの方向性に分かれているのが現状である．ひとつは，Successful Agingの研究の潮流を概観したもの，２つ目は，Successful Agingそのものを現状から対象者に面接を実施し，Successful Agingの意味として見えてくるものを因子探索的に分析し，カテゴリーを抽出したもの，３つ目は，Successful Agingの類似概念や周辺領域に関する実態調査や概念規定をしないままに，老化過程の現状を調査したものである．

Successful Agingの捉えを諸外国での１視点的な捉えではなく，我が国独自の社会，文化に根ざしたSuccessful Agingの捉えをも含めた既存の研究を概観し，見えてきた今後の課題については，①老化過程における対象者自身が語った体験・思いや思考をできるだけ詳細に記述していく作業の丹念な積み重ねと，②研究対象者を絞る場合の，人生における継続的な変化を捉え，対象者自身の主観を反映させた見解を得ること，③質的分析を行う場合，その対象者や方法論を含めた様々な角度からの弛みを持たせたTriangulationの実施の必要性という３つの方向性が示唆された[16]．

これらの現状と背景から，本研究では，Successful Agingの捉えを国内のみでなく，海外からの最新の潮流を踏まえたSuccessful Agingの捉えをも含めて既存の研究を概観し，さらに今後の課題について検討を行うこととした．

Successful Agingを知ることは，我々が向う今後の超高齢社会での高齢者の意識や思いを通して，あるべき姿を的確に把握する．そのことは，ケアする立場になる者への教育として活かされ，看護ケアの発展に寄与するものと考える．

研究方法

１．「Successful Aging」の定義

「Successful Aging」とは，年齢による喪失の衝撃を最小限にくい止めながら，肯定的な分野拡大の方法を見出し，人生に納得し満足して過ごしているプロセスとして，加齢変化に上手く適応するためにいかに自己を調整しているかということに焦点をあてる[8,17]．

２．研究手順

海外文献に関しては，1965〜2005年の期間のMEDRINEから，「Successful Aging，Elderly」「Successful Aging，Adult」「Successful Aging，Interaction」をKeywordとして検索した．海外文献では，Successful Agingのみでの検索をしたところ，1,514件であったため，それぞれのKeywordで絞込み検索を行った．選出した文献の中から，さらに看護学的視点に立った文献を選出した．本稿では，特に，前提とする学問的な立場について言及していない場合，上記の“看護学的視点”を考慮したうえで，国内外の「Successful Agingの捉え」に関する研究の動向を踏まえたうえで海外の研究動向を分析し，検討した．

結果および考察

１．海外文献

MEDRINEによる分析の結果，62件の文献が出力された．Suzukiら[18]は，農村地域の百寿者を対象に生活史や介護に関する分析を行っている．加えて，６名を対象に面接調査を実施し，量的な分析は，MMSEやADL，ZBIを用いている．面接調査の結果，勤勉さ，適応，克服，支援，敬愛の５カテゴリーを抽出している．対象者の特徴を，仕事や輪区割りを持ちつつ勤勉で，明るく朗らかな性格を保ち，その性格が，健康障害の克服や家族のソーシャルサポートにも影響を与えたとして示唆を述べている．松本ら[19]が同様の質的調査の基に抽出したカテゴリーとしては，満足，チャレンジ，健康，自負心，参加，自己保存を提示しており，どちらのカテゴリーからもイメージされるのは，活発で活き活きと日々を過ごしている高齢者像が伺える．Mezeyら[20]は，85歳以上の最適得点を調査した結果，13%が機能的に最適であり，45%が安寧であると報告している．看護ケアは超高齢者をその対象とすることが多いのが実状である．だが，その超高齢者には，個別の機能や思いがあることを配慮し，細やかな個別対応が求められ，その結果として個別の計画を設定しなければならないことも含めて検討している．Kahn[21]は，Successful Aging研究の第一人者として，そのベースとなる[3]つのモデルを紹介し，其々の利点を述べ，今後の方向性を指し示している．先ず，RoweとKahnモデルでは，個別性の重要性を優先している．身体的・心理的許容範囲を保持することを，自分自身でできるような視点から充実しているとしている．また，BaltesとBaltesのモデルでは，年齢によるデータが豊富であり，心理・身体・状況面での検討が充実している．次に，RileyとRileyモデルでは，社会的信念や組織の決まりなど，高齢者の成功する行動要因的な視点から充実した検討内容となっている．それらの[3]つのモデルは，今後のSuccessful Aging

研究の良い案内として適した報告であるとしている．それらの方向性を丁寧に検討することで，今後の研究に大きな示唆を与えている．Crowther ら[22]は，Successful Aging の Rowe と Kahn モデルについて，３つの要因に加えて，４番目の要因として積極的精神であると述べている．彼らの理論的枠組みは，Successful Aging モデルの用件を十分満たしている．高齢者の健康保持に焦点を絞り，精神面での介入提案を支持している．Successful aging を維持させ持続していくためには，健康・老化・精神面での科学的な根拠を提示しなければならない．危険や障害を調整し，活動的な生活を取り込み，身体的・心理的可能性を追求し，加えて積極的な精神面の取り込みをすることで，新たな Row と Kahn モデルとして位置づけている．Strawbridge ら[23]は，Rowe と Kahn モデルの３つの要因を参考にして，自己評価をしたものを検討している．定義の１つ目は，病気や障害のないこと，２つ目は，身体的・心理的保持，３つ目は，生活への活動的関与であった．15測定のうち，14測定において，Successful Aging の自己評価は，wellbeing とは対照的な結果を示したとしている．Seeman ら[24]は，社会関係やソーシャルサポート，健康的においていく過程の認知のパターンや高齢者の高い機能についてコホート研究で，1,189名を対象に Macarthur 研究での取り組みの一環を報告している．７年半の間認知機能の変化を調査し，加えて同じ期間，感情的なサポートをしたグループとそうでないグループとの差は，行動や心理面，健康状態等を調査し検討している．老化過程において，認知の機能を守るのは，社会的環境や役割により価値があることを提示している．我が国でも高齢者が，役割を担うことを奨励する方向にあるが，それが生きる上での自信となり，家族をはじめとする周囲の人からその存在を認められるということにも繋がりまた，そのことで自分の健康度を高く評価するという考え方もある[25,26]．高齢者が社会において持てる役割の創造・維持・回復・継続を重要視し[27]，その役割を身につけ，健康に気をつけながら，生きがい活動として社会に還元していくという考え方[28,29]を広く支持しているとも思われる．Cassel[30]は，高齢化が進み，現在に至るまでに考えられることが，幾つか挙げられる．その中に，ベビーブームや薬学の進歩，科学の進歩が挙げられている．高齢化が増加し，それとともに，疾患に罹る可能性も上昇する．それらを人口比率や統計を基に今後の QOL を検討したうえでの示唆を提示している．Van Wynen[31]は，Successful Aging への鍵として，老化過程の変化しつつある認識について３つの重要な視点を示している．ひとつは，病気や障害に関連した低いリスク状態である事，２つめに，高い精神力・身体的機能，３つめは，人生への活動的関与である．しかし，研究対象として関わった高齢者に対しては，調査票を基に，教育や健康に対する有意性を提示することに留まっている．Maddox[32]は，高齢女性を調査対象として，質的分析を加え，５つのテーマを導き出している．それらは，自分たちよりも大きな存在との相互作用，自己受容，ユーモア，柔軟性，利他主義であった．Successful Aging の視点を持ち高齢者を対象に，面接により質的に因子探索的な分析を加えた場合，自負心や適応，敬愛や参加等他者と接し，社会と関わることに意味を持たせ，自己を上手に調整しながら活き活きと暮らす高齢者像が見えてくる．その意味からも Maddox の導き出したテーマは十分それらを支持している内容と捉えられる．Barefoot ら[33]は，14年間の縦断研究を主軸に，精神的安寧，健康，長寿を評価するために対人関係信頼尺度を用いて変化をみている．健康と生活満足度は当然関連が高く，より長寿の者ほど信頼性が高く，自己コントロール法を見つけていた．Successful Aging の概念を検討する場合，対人関係信頼性尺度を用いることの有用性を明らかにしている．1980年代後半から1990年代後半にかけての Rowe[6,7,34]の報告は，老化過程を経験や性格，心理的要因等，多様性・個別性が強調されるとして，Aging の概念を Usual Aging と Successful Aging の２つの視点から検討する事を提唱した上で，Successful Aging の概念を①病気や障害の回避，②身体機能・認知機能の保持，③社会的生産活動の維持の３つの主要な構成要因と位置付けている．また，Butt ら[35]は，人間の価値や安寧についてオーストラリアや韓国，日本等13カ国に跨る国際的な調査を行っている．社会的，文化的，また民族的な差異は否めないが，トータルで検討しても，年代における認知に相違があったことを報告している．50歳以上では，人間関係や物欲に高い点を示し，25歳以下ではとても低い．壮年期では，仕事の満足が高く示され，老年期では，どの質問に対しても高い興味を示し，満足度も高かったとしている．Palmore[5]は，Successful Aging について，75歳以上で健康であるという条件のもと，長寿と健康の２つの条件をその基準として捉えた．これら，1970年代から1980年代の報告がその後の Successful Aging の概念や検討に大きく影響を与えている．

２．海外における先行研究の動向分析

海外における先行研究から，貴重な結果が検出されている．看護学領域からの報告は，決して十分検

討されているとは言い難い．だが，社会老年学の領域ではすでに，50年余の歴史を以って社会的背景を含みおきつつ提唱・検討が繰り返されているのである．

今回のSuccessful Agingに関する研究動向の検討では，1970年代後半から現在に至る研究動向を主軸とした．Successful Agingの研究には，その核となる部分にPalmoreやRowe，Kahnの主張は，その嚆矢としてその他の研究を大きくリードしている観は否めない．従来，老化や老いという言葉の持つマイナスのイメージだけではなく，プラスのpositiveイメージへの発想の転換も含め，提起している．

研究動向を傾向で纏めてみると，大きく3つの視点に分けられる．ひとつは，Successful Agingに関する概念提唱や要件や条件の設定を主張したもの．2つめは，人口動態や静態を検討した上で，現状の調査を行い，対象者の思いや認知機能等いくつかの尺度を投入，量的に分析し，その差異を検討したもの．3つめは，Successfulな老いへの過程や老い自体を，その渦中にある対象者に面接を実施し，見えてくる老いの意味を因子探索的に分析し，そのカテゴリーを抽出したものであった．

類似概念として，QOLの概念分析において，研究に用いられてきたQOLの内容が，人生の満足，安寧，人生の価値，自尊心などに代表されるのであれば，Successful Agingの意味とも重なる部分の存在も多く感じられる．また，ポジティブ・エイジングやナラティブ・アプローチ，フローとしての学び等Successful Agingを取り巻く，類似概念が提言されはじめている[36]．だが，今回，海外に視点を広げ，あえてQOLやポジティブ アプローチ等のキーワードを投入せず，検討課題としては扱わなかった．当然今後，類似概念として検討の余地は考えられる．しかし，Successful Agingは現在進行形の老化の過程でのSuccessfulな状態であり，その他のものは，ある一定の期間，またはその時点での安寧であると捉えるのであれば，少なからず相違はあって然るべきである．

以上のことを念頭に入れた上で類似概念を鑑みた場合，いずれも高齢期に向かうAgingに前向きさを秘めたテーマであることにはかわりなく，大きくはSuccessful Agingの概念に内包される．

海外における文献検討を行った結果，海外でも特に欧米におけるSuccessful Aging関連研究の内，特に理論や概念の提唱に関する文献は，かなり充実の件数が報告されている．今後，我が国独自の理論や概念構築に向けて，欧米における研究に追随するAgingの本質に焦点を絞った研究が求められる．

結　　論

海外の研究動向からみたSuccessful Agingに関する研究は，かなり充実した文献数があった．文献には大きく3つの捉えがあり，1）Successful Agingに関する概念提唱や要件や条件の設定を主張したもの，2）人口動態や静態を検討した上で，現状の調査を行い，対象者の思いや認知機能等いくつかの尺度を投入，量的に分析し，その差異を検討したもの，3）Successfulな老いへの過程や老い自体を，その渦中にある対象者に面接を実施し，見えてくる老いの意味を因子探索的に分析し，そのカテゴリーを抽出したものであった．

今後はさらに，海外での研究動向で得られた3つの視点を踏まえた上で，我が国独自の社会的，文化的背景をも反映されたSuccessful Agingの概念の定義化や条件，要件も念頭に，対象者自身が語る経験や思いや思考について幅を拡大して，研究を進め蓄積させてゆくことが望ましいと考えられる．また同時に，対象者自身の主観的分析から安寧やQOL等，Successful Agingの類似概念との関連を既存尺度の選定も含めて尺度開発等を通して，明らかにしていく必要がある．

本研究は，平成16年度川崎医療福祉大学総合研究の助成を受けて行ったものの一部である．

表１　Successful Aging に関する先行研究

研究者名	テーマ	結　　果
Mizue SUZUKI.et al.(2004)	Successful Aging: Review of LifeHistory and Caregiving Among Japanese centenarians	農村地域の100歳以上の百寿者に対象を絞り、生活史や介護を分析する事で百寿者のSuccessful Agingのあり方を分析している．量的な分析視点では、MMSEやADL、ZBIを用いている．半構成的に面接を行い質的な分析も行っている．その結果「勤勉さ」「適応」「克服」「支援」「敬愛」のカテゴリーを抽出している．
Mezey M. et al.(2002)	Successful aging.	successful agingについて、多くの人にその意味は何かと問われている．85歳以上の高齢者の最適得点を調査した結果、13%が機能的に最適であり、４５%が安寧であると報告している．看護ケアは超高齢者対象となることが多いが、個別対応を計画しなければならな
Kahn RL(2002)	On ″Successful Aging and Well-Being：Self－Rated Compared With Rowe and Kahn ″	RoweとKahn、Baltes とBaltes、RileyとRileyそれぞれのSuccessful Agingモデルについて、概要を述べている．Baltes とBaltesモデルでは、年齢によるデータが豊富であり、心理・身体・状況面での報告が充実している．RoweとKahnモデルは、個別性が重要視されている．身体的心理的許容範囲を保持する事が自身でできるような視点から充実した報告である．RileyとRileyモデルは、社会的信念や組織の決まり等、高齢者の成功する行動要因的な視点から充実した報告である．そして、それら3つのモデルは、今後のSuccessful Aging研究の良いガイドとなることを示唆として纏めている．
Crowther MR. et al.(2002)	Rowe and Kahn's model of successful aging revisited:positive spirituality-the forgotten factor.	RoweとKahnのSuccessful Agingモデルについて、3つの要因に加えて4番目の要因は、積極的精神であると述べている．彼らの理論的枠組みについてはSuccessful Agingモデルとしては、十分要件を満たしている．高齢者の健康保持に焦点を絞って、精神面での介入を提案していきたい．Successful Agingを維持持続させていくために、健康・老化・精神面での科学的根拠を提示しなければならない．危険や障害を調整し、活動的な生活を取り込み、身体的・心理的可能性を追求し、加えて積極的精神面の取り込みをRoweとKahnのSuccessful Agingモデルの新たな4つの組み立てと位置付けている．
Strawbridge WJ.et al.(2002)	Successful aging and Well-Being:Self-Rated Compared with Rowe and Kahn	Successful AgingをRoweとKahn(1998)の定義①病気や障害のないこと、②身体的・心理的保持、③生活への活動的関与を用いて自己評価している．15測定のうち、14測定においてSuccessful Agingの自己評価はwellbeingとは対照的な結果を示したことを報告している．
Seeman TE.. et al.(2001)	Social relationships, social support, and patterns of cognitive aging in healthy,high-functioning older adults:MacArthur studies of successful aging.	高い機能を持つ高齢者を対象に、コホート研究で1,189名にMacArthur 研究の一環でSuccessful Agingの認知のパターンや社会的地位やサポートの関係を調査している．7年半の間の認知機能の変化を分析している．同じ期間感情的なサポートをしたグループとの差は、行動や心理面、健康状態など、老化過程において認知の機能を守るのは、社会的環境や役割により価値があることを提示している．
Cassel CK. (2001)	Successful aging:How increased life expectancy and medical advances are changing geriatric care	高齢化が進み、現在に至るまでに考えられる事がベビーブーム、薬の進歩、科学の進歩が挙げられる．高齢者は増加するが、疾患に罹る可能性も高い．今後それらを踏まえたQOLを考えなければ成らないと説明している．
Van Wynen EA.(2001)	A Key to Successful Aging	老化過程の認識は、変化しつつあるが①病気や障害に関連した病気の低いリスク、②高い精神力・身体的機能、③人生の活動関与の重要性を述べている．しかし、研究対象とした高齢者へは、調査票を基に教育や健康に関する有意差を提示することに留まっている．
Maddox M(1999)	Older Women and the Meaning of Health	高齢女性の健康の意味として、自分たちよりも大きな存在との相互作用、自己受容、ユーモア、柔軟性、利他主義の5つのテーマを導き出した．
Barefoot JC. et al.(1998)	Trust, health, and longevity.	精神的安寧・健康・長寿を評価するために対人関係信頼尺度を用い、14年の継続研究を実施している．健康と生活満足度はより関係性が高く、より長生きの者ほど信頼性が高く、自己コントロール法を見つけていた．サクセスフルエイジングの概念として対人関係信頼性を用いることの有用性を明らかにしている．
Rowe JW.et al.(1998)	Successful aging.	高齢者の多くは、社会的、医学的、行動科学的、生物学的な有意な変化をする．Successful Agingとして老後を迎えるために、障害や病気の高い危険を回避する事、認知機能や身体機能を保持すること、人生を楽しみ続ける事、生産的活動をすること、のそれぞれが、重要な要因であると示唆している．
Rowe JW.et al.(1997)	Successful aging	successsful agingの概念として、①病気や障害の回避、②身体機能・認知機能の保持、③社会的生産活動の維持の3つを主要な構成要因としている．
Butt DS. et al.(1987)	Successful aging:a theme for international psychology.	人間の価値や安寧について、国際的な調査を13カ国において成人期にある対象に絞って調査をした報告である．老年期に至る前の段階においては、仕事の満足や人間関係や物欲を示す．オーストラリア、イタリア、日本、韓国など13カ国で調査している．50歳以上では人間関係や物欲にに高い点を示し、25歳以下では低い．壮年期は、仕事の満足が高く示し、もっとも高い年齢のグループは、質問に対して、とても高い興味を示し、満足もしていたと報告している．
Rowe JW.et al.(1987)	Human Aging：Usual and successful	老化の過程は経験や性格、心理的要因等、人様々である．エイジングの概念をusual agingとsuccessful agingとの２つに分けることを提案している．
Palmore E(1979)	Predictors of Successful Aging	successful agingを75歳に達し、かつ健康であるという条件で判断する方法をとって、75歳まで生存したかどうか、一定の条件に照らして健康であるかどうかということ、つまり長寿と健康の二つをその基準として捉えている．

文　　献

1）内閣府 編：高齢社会白書．財務省印刷局，東京，66–68，2001．

2）東京都老人総合研究所　編：サクセスフル・エイジング　老化を理解するために．ワールドプランニング，東京，11–25，46–52，1998．

3）中嶌康之，小田利勝：サクセスフル・エイジングのもう一つの観点　—ジェロトランセンデンス理論の考察—．神戸大学発達科学部研究紀要，**8**(2)，595–609，2001．

4）秋山弘子：日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信．老年社会科学，**22**(3)，338–342，2000．

5）Palmore E：Predictors of Successful Aging．The Gerontologist，**19**(5)，427–431，1979．

6）Rowe JW and Kahn RL：Successful Aging．The Gerontologist．**37**(4)，433–440，1997．

7）Rowe JW and Kahn RL：Human Aging：Usual and Successful．Science，**10**(237)，143–149，1987．

8）嵯峨座晴夫：エイジングの人間科学．学文社，東京，1993．

9）谷井康子：サクセスフル・エイジング概念分析．日本看護科学会誌，**21**(2)，56–63，2001．

10）Neville ES：Improving Care for The Frail Elderly：The Challenge for Nursing．Journal of Gerontological Nursing，**26**(7)，36–44，2000．

11）谷垣静子，佐藤卓利，小松光代，岡山寧子，大西早百合，安部登茂子，福間和美：中高年のサクセスフルエイジングに向けた準備行動　—介護意識と老後に向けての対処行動—．京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，**10**，107-113，2000．

12）安部登茂子，大西早百合，福間和美，岡山寧子，小松光代，谷垣静子，佐藤卓利：サクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究　—栄養・食生活からの検討—．京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，10217–10224，2001．

13）大西早百合，福間和美，岡山寧子，小松光代，佐藤卓利，安部登茂子，谷垣静子：中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究—地域社会・社会参加と準備行動の関連．京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，**10**，167–177，2001．

14）斎藤高雅，浅香昭雄：100歳の一卵生双生児にみられる性格特徴とサクセスフルエイジング．臨床精神医学，**23**(11)，1311–1315，1994．

15）安次富郁哉，富村京，端慶覧涼子，稲富徹也，小倉正巳，秋坂真史，鈴木信：高齢者の Successful Aging に関する研究．日本農村医学会雑誌，**47**(4)，667，1998．

16）松本啓子，若崎淳子：Successful Aging に関する研究の概観と今後の課題　—国内文献からの検討—．川崎医療福祉学会誌，**15**(1)，135–140，2005．

17）小田利勝：サクセスフル・エイジングに関する概念的一考察．徳島大学社会科学研究，**6**，127–139，1993．

18）Mizue SUZUKI, Masao KANAMORI, Hiroaki MIYAJIMA, Harumi KAJIYA and Masako SIRAKI：Successful Aging： Successful aging：Review of Life History and Caregiving Among Japanase Centenarians．医学と生物学，**148**(6)，10–17，2004．

19）松本啓子，渡辺文子：後期高齢者の Successful Aging の意味　—郡部に居住する高齢者の聞き取り調査から—．日本看護研究学会雑誌，**27**(5)：25–30．2004．

20）Mezey M and Fulmer T：Successful Aging．American Journal Nursing，**102**(8)，11，2002．

21）Kahn RE：On “Successful Aging and Well-Being:Self-Rated Compared With Rowe and Kahn”．The Gerontologist，**42**(6)，725–726，2002．

22）Crowther MR，Parker MW，Achenbaum WA，Larimore WL and Koenig HG：Rowe and Kahn ’s Model of Successful Aging Revisited：Positive Spirituality-The Forgotten Fastor．The Gerontologist，**42**(5)，613–620，2002．

23）Strawbridge WJ，Wallhagen MI and Cohen RD： Successful Aging and Well-Being：Self-Rated Compared With Rowe and Kahn．The Gerontologist，**42**(6)，727–733，2002．

24）Seeman TE, Lusignolo TM, Albert M and Berkman L：Social Relationships, Social Support, and Patterns of Cognitive Aging in Healthy, High-Functioning Older adults：MacArthur Studies of Successful Aging．Health Psychology，**20**(4)，243–255，2001．

25）芳賀博：老人の日常生活の理解から．新井弘明編，これからの老人保健活動　住民・行政・専門家集団の共生をめざして．第1版，医学書院，25–32，1994．

26）松田晋哉，筒井由香，高島洋子：地域高齢者の生きがい形成に関連する要因の重要度の分析．日本公衆衛生雑誌，**45**（8），704–712，1998．
27）山内一史，大森純子，山田嘉明，安斎由貴子，結城美智子，栗原律子，太田喜久子：超高齢地域における在宅高齢者の日常生活活動と社会的役割, 健康状況の分析．宮城大学看護学部紀要，**3**（1），91–98，2000．
28）嵯峨座春夫：エイジングの人間科学．学文社，第一版，161–168，1993．
29）藤田千嘉子，舟木理恵，松本啓子：在宅における後期高齢者における役割の意味．日本看護学会論文集第35回地域看護，122–124，2005．
30）Cassel CK：Successful Aging How increased life expectancy and medical advances are changing geriatric care．Geriatrics，**56**(1)，35–39，2001．
31）Van Wynen EA：A Key To Successful Aging：Learning-Style Patterns of Order Adults：Health care providers need to understand older adults ’style of learning to more effectively teach this population how to live longer, healthier lives．Journal of Gerontological Nursing，**27**(9)，6–15，2001．
32）Maddox M：Older Women and the Meaning of Health，Journal of Gerontological Nursing，**25**(12)，26–33，1999．
33）Barefoot JC，Maynard KE，Beckham JC，Brummett BH，Hooker K and Siegler IC：Trust，Health，and Longevity．Journal of Behavioral Medicine，**21**(6)，517–526，1998．
34）Rowe JW and Kahn RL：Successful Aging．Aging ，**10**(2)，142–144，1998．
35）Butt DS and Beiser M：Successful Aging：A theme For International Psychology．Psychology and Aging，**2**(1)，87–94，1987．
36）堀薫夫：高齢者の生涯学習をめぐる課題と展望．老年社会科学，**22**(1)，7–11．2000．

（平成17年11月20日受理）

Review of Research Approaches to Successful Aging

Keiko MATSUMOTO and Atsuko WAKASAKI

(Accepted Nov. 20, 2005)

Key words : successful aging, elderly, general view, opinion

Abstract

This study reviewed 15 previously published overseas journal articles relating to "Successful Aging". The articles were classified into three categories; 1) articles dealing with a conceptualization of successful aging while identifying and describing factors predicative/ indicative of success in the process of aging; 2) quantitative studies conducted to investigate demographic characteristics, thoughts, experiences, and functions of the aging population; and 3) articles identifying key themes and categories emerging from interviews with older people in the process of aging and searching for the meaning of Successful Aging. The reviews suggest that it may be necessary to collect sufficient data concerning experiences, thoughts, and functions of older people with the intention of developing a socioculturally appropriate conceptualization of Successful Aging on the basis of the theories and concepts demonstrated in the overseas research works, as it pertains to the culture and experience of those being questioned. Also, it may be the case that the relationship between Successful Aging and its related concepts, such as well-being and QOL, need to be clarified through an analysis of subjective experiences of older people and a development of new, culturally appropriate, scales.

Correspondence to : Keiko MATSUMOTO Deparment of Nursing, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: keimatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 403–410)